

## ▽伊勢物語の特徴

「　　」の最初の作品  
「　　」とみやびの文学

## ▽さりに詳しく述べ

中古・平安初期の成立。一二五段前後から成るが、各段に必ず一首以上の歌をふくみ、その歌を中心として物語が展開され、それぞれが独立した物語となつてゐる。いわゆる典型的な「　　」である。

各段の多くは「昔、男ありけり」で始まり、その「男」(主人公)は『　　』の代表的歌人であり、「　　」の一人である「　　」と想像される。

全体の約三分の二の段が「　　」を取り上げ、残りの段で肉親の情・主従の情・友情・旅情などを描いてゐる。一貫する精神は、平安貴族の理想とする「　　」(優雅なふるまい)であり、文体は簡潔で、叙情性も豊かである。

有名な段としては、「初冠の段」(一段)、「　　」の段」(六段)、「　　」の段」(九段)、「　　」の段」(二三三段)、「梓弓の段」(二四段)、「惟喬親王の段」(八二・八三段)などが挙げられる。

## 芥川(六段)

## ●登場人物

- 男
- 女 || 二条の后
- 堀川の大臣
- 太郎国経の大納言

## ▽歌について

白玉か 何ぞと人の 問ひし時 つゆとこたへて 消えなましものを

**訳** (あれは) 白玉(真珠)ですか、何ですかとあの人尋ねたとき、(あれは)露ですよと答えて

(私も露のように)消えてしまえばよかつたのになあ。(そうすれば、悲しまずにすんだのに。)

問一 傍線部「あの人」とは誰ですか。

問二 この歌を詠んだのは誰ですか。

## 東下り（九段）

●登場人物

○男 ○友とする人 ○修行者 ○渡し守

▼歌について（現代語訳文の空欄に、適当な語句を入れなさい。）

① から衣 着つつなれにし つましあれば

はるばるきぬる 旅をしそ思ふ

訳

何度も着ているうちに肌に「

」から衣のように、長年

「 」親しんできた妻が（都に残つて）いるので、はるばる

やつて来た旅が（しみじみと悲しく）思われることだ。



問 次の修辞法の正しい組み合わせを線で結び、①の歌で使われているものがある場合は、それを指摘しなさい。

(p. 98 ~ 99 参照)

○枕詞 ． 歌の中心となる語句と縁のある言葉を使い、歌にあやをつけた手法。

①の場合 「

○序詞 ． 特定の言葉の上に置かれ、その言葉を飾つたり歌の調子を整えたりする語。五音が多い。修飾する語との関係は習慣的に一定している。

①の場合 「

○掛詞 ． 僮名五文字を、一句から五句までのそれぞれの頭に置いて歌を詠むこと。

①の場合 「

○縁語 ． 同音異義語を利用して、一語またはその一部分に二つ以上の意味を兼ねさせる技巧。

①の場合 「

○折句 ． 特定の言葉の上に置かれ、その言葉を飾つたり歌の調子を整えたりする語のうち五音以上のもの。作者が情意をもつて自由に作り出す一回限りの表現であることが多い。

①の場合 「

② 駿河なる 宇津の山辺の うつつにも 夢にも人に あはぬなりけり

訳 駿河の国にある宇津の山のあたりにさしかかったが、（その山の名前のように）「

あなたと会わないことだなあ。（それは、あなたが私を忘れてしまったからだらう。）

③ 時知らぬ 山は富士の嶺 いつとてか 鹿の子まだらに 雪の降るひむ

訳 時節をわきまえない山は、富士の山である。今をいつだと思って、鹿の子まだらに「

」でも夢の中でも

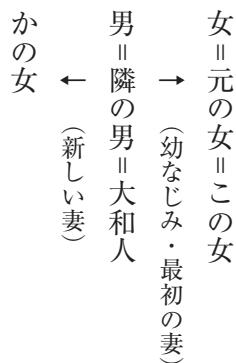
」。

④ 名にし負はば じざこと問はむ 都鳥 わが思ふ人は ありやなしやと

訳 （都という）名前を持っているならば、さあ尋ねよう、都鳥よ、私の「」は（都で）無事に暮らしているのかいないのかと。

**筒井筒** (二三段)

## ●人物関係図



## ▼歌について

① 筒井つの 井筒にかけし まろがたけ 過ぎにけりしな [妹見ざるまに]

**訳** (幼いころ) 筒井の井筒(井戸の枠)と高さを比べた私の背丈も、(井筒の高さを) 越えてしまったことだろうよ。あなたと会わないのでいる間に。

② 比べこし 振り分け髪も 肩すぎぬ [君ならずして たれかあぐべき]

**訳** (あなたと長さを) 比べ合ってきた私の振り分け髪も、肩を過ぎるほど長く伸びてしまった。あなたではなく、いつたい誰のために髪上げをしようか。(あなたのためにするのだ。)

③ 風吹けば 沖つ白波 たつた山 夜半にや [君が ひとりじめりむ]

**訳** 風が吹くと沖の白波が立つ、その「[ ]」という名の龍田山を、夜中にあなたは一人で越えているのだろうか。

④ [君]があたり みつつを居らむ 生駒山 [いこまやま] 雲な隠しそ 雨は降るとも

**訳** あなたの(いらっしゃる)あたりを見つめながら暮らしていよう。生駒山を、雲よ隠さないでくれ、たとえ雨は降つても。

⑤ 君來むと 言ひし夜ごとに 過ぎぬれば 頼まぬものの 恋ひつづぞ経る

**訳** あなたが来ようと言った夜ごとに(待っていたのに、むなしく時間が)過ぎてしまうので、もうあてにはしないが、それでもあなたを)恋しく思い続けて日を送っていることだよ。

問一 ①～⑤の歌を詠んだのは、それぞれ誰ですか。

①「[ ]」 ②「[ ]」 ③「[ ]」 ④「[ ]」 ⑤「[ ]」

問二 ①～⑤の歌の囲み部分はすべて「あなた」を意味する言葉ですが、この「あなた」とは、それぞれ誰を指しますか。

①「[ ]」 ②「[ ]」 ③「[ ]」 ④「[ ]」 ⑤「[ ]」

問三 ③の空欄に当てはまる適当な言葉を書き入れなさい。

問四 ④の傍線部「雲な隠しそ」について、何を隠さないでくれと言っているのですか。

〔 〕

## ▽大鏡の特徴

- ・歴史物語「」の先駆
- ・道長撰関政治に「」的

## ▽さらに詳しく述べ

成立は平安後期と推定される。鏡は「」

」の意。

内容は、紫野の雲林院の「」が始まる前に、大宅世継（190歳、流布本150歳）と夏山繁樹（180歳、流布本140歳）、繁樹の妻、若侍（30歳くらい）らが会い、主に「」が歴史を語り、他の三人が相づちを打ち補足するのを、そばで聞いていた筆者が筆録するという形をとる。

文徳天皇の嘉祥三年（八五〇）から後一条天皇の万寿二年（一〇二五）に至る、一四代・一七六年間の歴史を物語風に記す。この人物中心の歴史叙述法を、中国の「」にならって「」

という。

歴史物語の先駆となつた「」が「」に終始しているのに対し、戯曲的対話形式という方法で道長の功罪を挙げ、「」から語っている。深く「」に迫ろうとしており、歴史資料としても価値が高い。この影響を受けて、「」『』『』『』などの鏡物（『大鏡』）を加えて「」

という）が次々と書かれた。

## ●冒頭部

先つころ、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁一人、嫗といきあひて同じ所に居ぬめり。

問一 傍線部①の主語は誰ですか。「」

問二 同じ傍線部①「侍り」の意味・用法について説明した、次の文の空欄に当てはまる適当な言葉を書き入れましょう。

※「」活用の補助動詞「侍り」の「」形で、話し手（書き手）が聞き手（読み手）に敬意を表すために用いる「」語。

問三 傍線部②について、推量の助動詞「めり」を使うことで、断定を避け遠回しにいう婉曲表現を用いていますが、その理由として最も適当と思われるものを次から選びましょう。

- ア 老人たちが普通の人とは異なつて、まるで幽霊のように姿が透けて見えたため。
- イ 筆者は老人たちのことを直接見ていないため。
- ウ 筆者はやや離れたところから老人たちを見ているため。

### ▽平家物語の特徴

- ・源平の興亡を描く「」が語り伝え、流麗な「」で書かれた。

### ▽さらに詳しく述べ

成立は明確ではないが、琵琶法師が「」として語り伝えたもので、南北朝時代に活躍した琵琶法師の巨匠覺一によつて応安四年（一三七一）に完成された「」が一般にはよく知られている。異本が多く、大きく分けて、琵琶法師によつて語られた「」系と、読み物としての「」系とがある。

内容の中心は、「」の元暦二年（一一八五）までの約二〇年間である。「」を説く一文で筆を起こし、平家繁栄の陰で泣く祇王・小督らの女性哀話、反平家の動きを見せる俊寛らの運命、以仁王の挙兵と敗退、平家を都から掃討しながら同族の頼朝に滅ぼされる「」、勇猛果敢な義経の合戦譚など、様々な逸話を七五調を基調とした流麗な「」で描く。覚一本では、我が子、安徳天皇を失つた建礼門院の出家とその死で終わる。

古代の終焉と中世の始まりという転換期を告げる作品で、『太平記』など軍記物語はもちろんのこと、中世の謡曲や近世の淨瑠璃など、後代の文学に大きな影響を与えた。

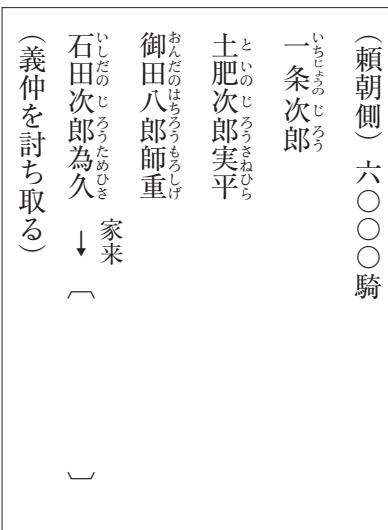
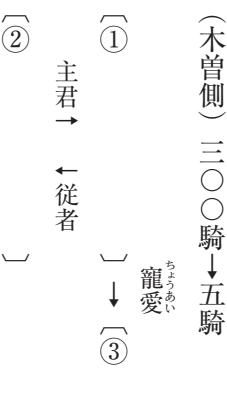
### 祇園精舎

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。

この冒頭文に見られるように、万物はすべて移り変わるという意の「」と、榮えるものは必ず滅びるという意の「」を掲げ、『平家物語』全編を貫く根本主題として「」を説く。さらに「おこれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。」と続き、平清盛をはじめとする平家一門の権勢と滅亡を内容の中心に据えていることが読み取れる。

### 木曾の最期

#### ●人物関係図



## 『こころ』登場人物関係図

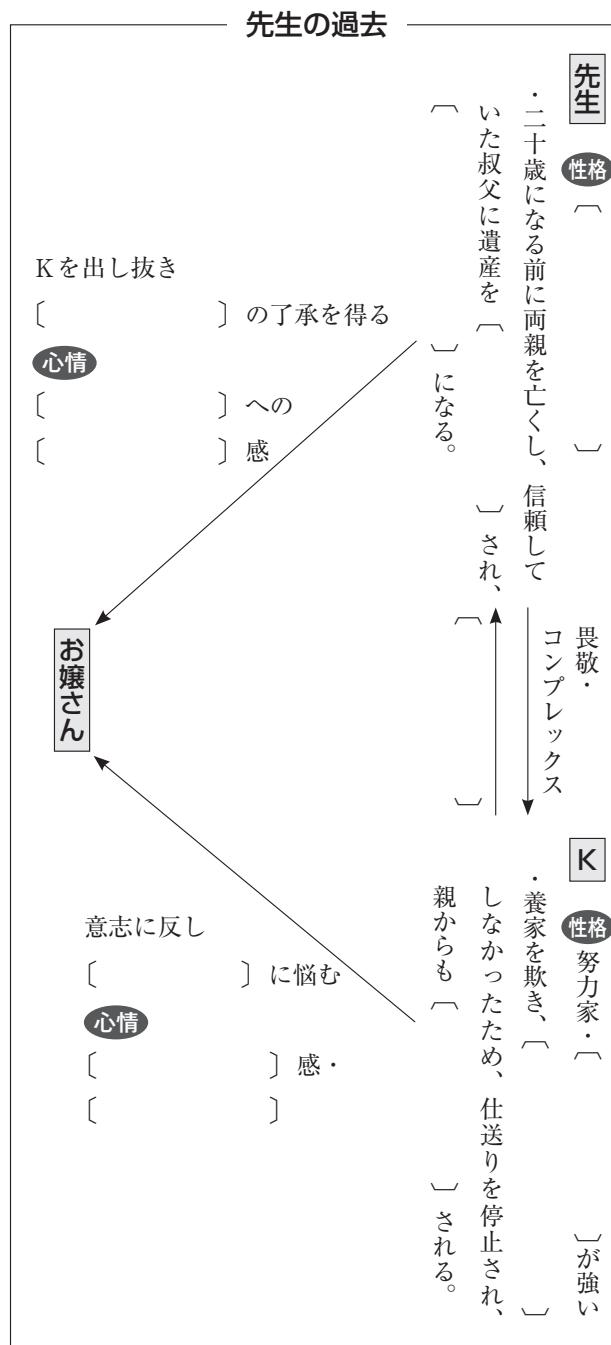
私

目標もなく「

」を持つ先生の過去に興味を抱く。

」を送る。

先生からの「」の中で明かされる



## ▼夏目漱石について

(一八六七(慶應三)年~一九二六(大正五)年)

東京牛込に生まれる。生後すぐ里子に出されたり、他家へ養子に出されたりした。早くから漢籍に親しみ、漢学塾の二松学舎に入学、「」的な倫理観や「」的な美意識を身につけた。第一高等中学校本科に進学。この頃、同級生の「」から句作の手ほどきを受け、俳句を始める。明治二三年、「」大学「」科に入学。同二六年に大学院に進学。同二八年、旧制松山中学に「」をして赴任。この松山での体験が、後に中編小説として「」に渡った。しかし、日々に実感する西洋との隔絶感などのために、強度の「」に陥る。この留学体験から、「」の立場を固めた。帰国後、「」講師を務めながら、高浜虚子の勧めで「ホトトギス」に「」を連載。以後、「倫敦塔」(『ロンドン塔』)、「」(『』)、「」(『』)を発表する。文壇は自然主義の最盛期であったが、漱石は余裕を持って人生を眺める立場を崩さず、「」と批判された。明治四〇年、教職を辞め、「」などを掲載。「三部作」と呼ばれる『三四郎』(『』)に入社。以後、新聞小説として『坑夫』(『こうふ』)、「夢十夜」(『ゆめじゅうや』)、「三十四郎」(『さんじゅうよろう』)など、伊豆の修善寺で大吐血し、生死の間をさまよう。この「」(『』)に続く『』(『』)は、漱石の人間観・死生観に大きな変化をもたらし、エゴイズムの問題を追究した『彼岸過迄』(『こうげんすきまで』)や『行人』(『こうじん』)が書かれることとなる。このころ漱石は、「」(『』)や『私の個人主義』など、講演が書かれることとなる。このころ漱石は、「」(『』)の執筆にとりかかったが、病状が悪化し、未完のまま亡くなつた。なお、筆名である「漱石」は、故事成語「」から取られた。(p. 374 参照)

## 状況設定

場所 「 」 ( ) 県)

「自分」の境遇 「 」

## 心境の軌跡

★ 「 」について考える

## ①蜂

毎日せわしく働いていた一匹の蜂の死。

## ②鼠

小川で首に串を刺され、あがき回る鼠。

## 死者の 「 」 。

## 生きるもの 「 」 。

「 」を担いながら、

「 」様子が妙に頭に付いた。

自分は寂しい嫌な気持ちになつた。あれが本当なのだと思った。

## ③いもり

驚かすつもりで投げた石が当たつて、死んでしまつたいもり。

## 生と死を分かつ 「 」 。

自分は偶然に 「 」 。いもりは偶然に 「 」 。

「 」と「 」は両極ではなかつた。  
さして「 」 ような気がした。

## ▼志賀直哉について

（一八八三（明治一六）年）—（一九七一（昭和四六）年）

宮城県石巻町に生まれる。二歳のころ、東京の祖父母宅へ転居。実業家の祖父の保護のもと、祖母にてられる。学習院初等科に入学し、キリスト教思想家「 」の影響を受ける。足尾銅山鉱毒事件の見解について「 」と衝突。以後、決定的な不和の原因となる。明治三九年、「 」大学英文学科入学。「 」科に転じた後、中退。明治四三年、同級生の「 」らとともに「 」を創刊。「 」、「 」など次々に発表した。父との不和が原因で、東京を離れ、尾道・松江・京都・千葉県我孫子と転々とした。大正六年、心境小説の領域を開拓した「 」に託した長編小説「 」、「 」を発表し、文壇に確固とした地位を得る。『小僧の神様』を発表後、直哉自身の内面的な発展を主人公「 」に終生、慕われた。



## 登場人物

下人：使われていた主人から、四、五日前に「」を出された。

老婆：死人の髪の毛を抜いて、かつらにする商売を行っている。

## 場所

「」の下 ↓ 樓上

## 時間

ある日の「」

**あらすじ** 次の表内の空欄に適当な語句を書き入れ、『羅生門』のあらすじをまとめてみましょう。

場面	人物	状況、出来事、心情、会話文など
羅生門の下	下人	・雨に降りこめられ、行き所がなくて、「」。
羅生門の楼上へ出る	下人	・明日の暮らしをどうにかしようとして、「」よりほかに仕方がない」ということを、積極的に肯定するだけの「」が出ずにはいた。
梯子	老婆	・死骸の中にうずくまる、猿のような老婆を見つける。
羅生門の楼上	下人	・六分の「」と四分の「」とに動かされて、呼吸をするのさえ忘れる。
老婆	老婆	・女の死骸から髪の毛を一本ずつ抜き始めた。 ・「」が少しづつ消え、老婆に対する激しい「」、あらゆる悪に対する「」が強さを増す。
下人	下人	・老婆に太刀をつきつける。「」の心が冷める。安らかな「」と「」とがあるばかりである。 ・「この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじや。」「これともやはりせねば、餓え死にをするじやて、「」することじやわいの。」
		・老婆の話を聞いているうちに、心にある「」、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

○『羅生門』発表の時代  
『羅生門』は大正四年「帝國文学」誌上に掲載された。

同年には夏目漱石の『道草』や森鷗外の『山椒大夫』なども発表されている。  
なお、この前年（大三）には漱石の『こころ』が、翌々年（大六）には志賀直哉の『城の崎にて』が発表された。

## ▽漢字の学習（次の漢字の読みを書きましょう。）

災い	（	）	碎く	（	）	始末	（	）
顧みる	（	）	暇	（	）	余波	（	）
空模様	（	）	影響	（	）	夕闇	（	）
局所	（	）	肯定	（	）	遠慮	（	）
幸い	（	）	濁る	（	）	天井裏	（	）
揺れる	（	）	無造作	（	）	範囲	（	）
未練	（	）	塞ぐ	（	）	円満	（	）
成就	（	）	鋭い	（	）	存外	（	）
平凡	（	）	侮蔑	（	）	恨む	（	）

## ▽語句の学習（語句と意味の組み合わせを線で結びましょう。）

- 途方にくれる
- ・決着をつける。
- とりとめのない
- ・言い方が適切でないため誤解が生じる。
- かたをつける
- ・どうしたらしいかわからなくて困る。
- 高をくくる
- ・はつきりとしたまとまりがない。
- 語弊がある
- ・相手の程度を見くびる。

## ▽芥川龍之介について（一八九二（明治二十五）年～一九二七（昭和二）年）

東京に生まれる。誕生日の明治二五（一八九二）年三月一日は、辰の年辰の月辰の日で、しかも生まれた時刻も辰の刻（午前八時ごろ）だったところから、辰之助<sup>（龍之介）</sup>と命名されたという。生まれつき神経質でひよわな体質の少年だったが、学業成績は抜群で、泉鏡花や江戸の戯作に親しんだ。

大正二年、一高から「」大学英文科に進学。雑誌「」（第三次・四次）に参加し、創作活動も在学中に開始した。「」に激賞され、「芋粥」「手巾」を書いて文壇に登場。

大正四年末からは、漱石門下の集まりである木曜会にも出席した。結婚の年（大正七）には『蜘蛛の糸』を発表。また『』を新聞に連載した。さらに『奉教人の死』や『枯野抄』などによつて、日常生活とは異質の感動を求める、「」の作風を明瞭に示した。

大正一年、『藪の中』『トロッコ』などを発表するが、このころから神經衰弱や胃けいれんなどに悩み、身体の不調を訴えるようになる。さらに関東大震災以後の「」会機運の中で、創作活動も停滞しがちになった。

昭和二年、『河童』の執筆や「」との論争などの活動を行うが、「唯ほんやりした不安」を訴えて、枕元に『聖書』を置いて服毒自殺する。『歯車』『或阿呆の一生』『西方の人』などが、遺稿として残された。

## 登場人物

●主人公：李徵

出身地：『　　』

若くして超難関の資格試験：『　　』（進士）に合格。

## 豆知識

進士は、出自・家庭環境が良く、幼いころから勉強していないと合格は難しい。試験は政治的な知識はもちろんのこと、漢詩・文章が作れないと合格できない。

役職：『　　』：江南地方の軍事や警察などを司る官。

性格：『　　』：片意地で他人と相いれない。

『　　』：プライドが高い。

## 李徵の親友

『　　』

## 時代

『　　』の末年：唐の時代。

## 豆知識

七五五年、辺境防衛の任に当たる節度使が地方軍閥化し、「　　」が起こった。28歳で即位した玄宗皇帝が「　　」との愛欲に溺れ、政治の腐敗が進んだ。

唐の時代に活躍した詩人：杜甫・李白・王維など。

（p. 328 ~ 331 参照）

## あらすじ

李徵は、「　　」の生活に満足できず、「　　」として名を遺すことを見越して辞職するが、文名はあがらず、再就職をする。プライドの高い李徵は、発狂し「　　」に姿を変える。「　　」と化した李徵に再会したかつての親友「　　」は、李徵自身から、「　　」が心中の「　　」となり、やがて体も「　　」となつてしまつたきさつを聞く。

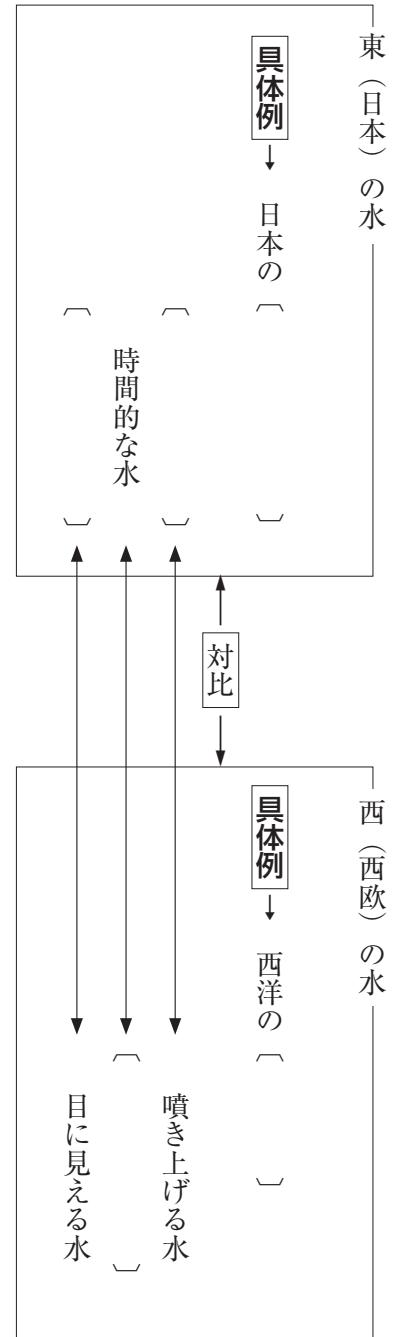
## ▽中島敦について

（一九〇九（明治四二）年～一九四一（昭和一七）年）

東京四谷に生まれる。中島家は「　　」の家系で、幼いころから漢学に親しみ、中国古典に精通する。両親の別居に伴い、母と離別後、父について奈良・浜松・ソウルなどを転々とする。大正一五年、「　　」文科に入学。肋膜炎にかかり一年間休学。この頃から生涯の持病となる「　　」の発作に苦しむようになる。昭和五年、「　　」大学、「　　」科に入学、同八年に卒業後、横浜高等女学校に就職。教職に就きながら執筆を続け、昭和九年、雑誌「中央公論」の懸賞に応募し、「虎狩」が選外佳作となる。昭和一年には、中国各地を旅行。一六年には教職を退職し、南洋庁書記官として「　　」に赴任するが、喘息の発作と風土病に苦しむ。昭和一七年、「　　」に赴任中、深田久弥の紹介で短編小説『古譚』（『　　』、「文字禍」）が発表され文壇に登場した。帰国後、ステイーブンソンの晩年を描いた『　　』が発表され文壇に登場した。没後、昭和一八年に『弟子』、『　　』、昭和二二年に『わが西遊記』が遺稿として発表された。



▽評論中に示されている、対比、具体例を押さえましょう。



### 水に対する日本人の感性とは（まとめ）

もし、流れを感じることだけが大切なだとしたら、われわれは水を実感するのにもはや「　　」を間接に心で味わえばよい。そう考えればあの「〔　　〕」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだといえるかもしれない。

### ▽漢字の学習（次の漢字の読みを書きましょう。）

愛嬌	( )	一端	( )	緊張	( )
跳ねる	( )	徒勞	( )	曇る	( )
音響	( )	刻む	( )	静寂	( )
仕掛け	( )	強調	( )	素朴	( )
忙しい	( )	間隔	( )	華やか	( )
趣向	( )	凝らす	( )	埋める	( )
別荘	( )	埋める	( )	郊外	( )
造型	( )	彫刻	( )	壮大	( )
乏しい	( )	発達	( )	掘る	( )
粘土	( )	独特	( )	圧縮	( )
受動的	( )	行為	( )	感性	( )

### ▽語句の学習（語句と意味の組み合わせを線で結びましょう。）

- 徒労
  - ・物事を行う際に、味わいやおもしろみが出るよう工夫すること。
  - ・いやがうえにも・
  - ・趣向を凝らす
  - ・息をのむ
  - ・間が抜ける
  - ・表情に乏しい
- 愛嬌
  - ・感情による顔つきの変化があまり見られない。
  - ・恐れや驚きなどで一瞬息が止まる。
  - ・苦労したことが無駄になつてしまふこと。
  - ・すでにそ�であるうえにいよいよ。
  - ・手抜かりがあり不十分である。